

## ベルリン国際映画祭 ヨーロピアンフィルムマーケット オンライン参加レポート

一度だけ、ベルリンの街を訪れたことがある。その時はインディペンデント系の映画祭に入選しての初渡独、会場はベルリン国際映画祭の一会場でもあるクラシカルなシアターだった。やはり映画関係者にとってはカンヌと並び世界最高峰のフェスティバルが開催されてきたベルリンという街は魅力があるのだろう、小さな映画祭にも関わらず、世界中から多くのフィルムメーカーが集まっていた。

そんな映画祭の雰囲気を楽しみながらも、私が何より興奮したのはベルリンの美術館、博物館の充実ぶりで、映画を含め文化芸術や歴史を大切にす国民性を強く感じ、羨望の念を憶えた。博物館の剥製の精度の高さ、保存状態の良さ、鉱物コレクションの展示の美しさ。それらには一貫した美意識があり、自然科学の研究に対してもアートの眼差しが間違いなくあると思い、圧倒された。更に最も刺激的だったのは、美術館を巡り歩き、ボスやベックリン、フリードリヒなどの大好きな絵画の実物を、日本のように行列になってではなく、広々とゆったり、一点一点の絵と対話するように鑑賞出来たことだが、本当に眩暈のするような名画が何の主張もなく並んでいる展示室の中に居た、一組の親子の姿が特に印象的だった。一枚の絵の前に立ち並んだ、父親と小学生の娘と思われる二人は、その絵について対話をしていた。言語は分からないが、父親は自分がその絵を大好きであることを、全身で喜びを表現しながら娘に説明している様子だ。娘もそれを、楽しそうに聞いている。この絵はいくらの価値があるとか、どういう賞を獲ったとか、そういうことではなく、純粋に絵を愛し、楽しんでいる。その姿から、娘もアートに触れる姿勢を自然に学んでいる。これは日本の美術や映画教育では全く行われていないことで、海外映画祭で選ばれる映画の芸術性・作家性の高さと、商業主義的ではなくても大きな予算を投入し、それら作品を作り出すことの出来る文化の下地、というものを強く感じさせられ、日本でオリジナル企画の映画を作ることの難しさを日々感じている者として、根底の部分での文化芸術の捉え方の違いを目撃して、いろいろ考えさせられた。

前置きが長くなったものの、私にとってベルリンはそういう憧れがある街であり、今回のヨーロッパフィルムマーケットへの派遣は、何としても参加したいと思い応募した次第。結果として、終息しないコロナ禍の影響でマーケットはオンラインとなっしまい、フィジカルでベルリンに行くことは叶わなかったものの、ヨーロッパを中心に世界で活躍しているプロデューサーやセールスエージェント、そしてカンヌ監督週間・ロッテルダム・トリノ・シドニー・釜山など世界の主要映画祭のプログラムディレクターから様々な話を伺えて、私の直近作への感想や新企画へのアドバイスも頂き、たいへん有意義な機会となった。前述したヨーロッパと日本の芸術文化に対する取り組み方、考え方の違いも、生の声によってより如実に感じ、作品制作から公開におけるプロデューサーの役割の重要性と、映画を含む芸術文化教育の推進によって未来の観客を育てることが、今の日本において急務である

ことを改めて痛感した。

特に興味深かった点を具体的にいくつか書くと、日本ではその役割がどこか曖昧なところがあるプロデューサーというポジションが、ヨーロッパにおいては契約等のビジネス面からクリエイティブ面まで、映画製作全体に対しプロフェッショナルとして関わり、監督との役割分担が明確で、二人三脚で作品をつくり出している、ということ。現状の日本のインディペンデント映画界隈は、監督がプロデューサー的なことまでやらないと成り立たない状況だと私は思っているが、同時にそのやり方で出来ることの限界、行ける場所の限界も感じているので、どうすればヨーロッパのようなやり方が出来るのか、そういうプロデューサーがどこにいるのか、どうやって育成していくべきなのか、など色々考えてしまった。

また、セールスエージェントと映画祭プログラマーの話は相反するところがあり、それも面白かった。常日頃から、三大映画祭などいわゆる国際 A 級と言われる大きな映画祭に選ばれたり、海外で作品を売り込むにはセールスエージェントがいないと無理、作品の力だけでは限界がある（有名映画祭は応募総数が多すぎるため、プログラマーは全ての作品を丁寧に観てくれない、誰かのお墨付きがある作品を優先的に観る）と言われることが多いが、今回のオンラインミーティングの中で、セールスエージェントは正に同様のことを話し、また国際的に売するためには A 級映画祭に入っていない作品はほぼ無理である、と断言。一方、映画祭プログラマー各位は、作品を観て選んでいるからエージェントの有無は関係ない、私たちは良い作品を見つけるのが仕事だ、とこれも断言。

どちらが正解なのか、いや恐らく正解はなく、ケースバイケースだと思ったが、低予算でやり繰りしている作り手の一人として、このエージェント問題と、どうやってより大きな映画祭にステップアップしていくかは、いつも頭を悩ませていることで、簡単な解決策や答えはない、と今回の参加を通じても感じた。

また、コロナ禍の影響によりヨーロッパの作品も公開延期等が続いているので、遠いアジアの国・日本の映画をヨーロッパで公開したり売り込むのは、以前よりも更に難しい状況となっている、ということも各人の話の端々から分かり、厳しい現実を突きつけられた。

一方で、当たり前のことではあるが直ぐにトップの世界にいけるものではなく、どの監督も一歩一歩階段を昇っていく、一作品毎にキャリアを積んでより良い映画祭、より良い発表の環境やセールス状況を掴んでいくものだ、ということを確認でき、地道に作り続けることの大切さについて、想いを巡らせることとなった。

また、必ずしも大きい映画祭に選ばれたり参加することが絶対、という訳ではなく（大きい映画祭にやってくるプロデューサーやエージェント等は忙しすぎて、国際的に無名の新人監督を相手にしている時間がないのが事実）、たとえローカルでも、作品や監督としっかり向き合ってくれる映画祭のほうが時間をかけて親しい人間関係を構築することが出来、そ

れが将来の作品製作に結びつくことが多々ある、という話をトリノ映画祭のディレクターたちから伺い、それは私自身も日本国内の映画祭に参加してきた経験から強く実感していることなので、色々な可能性や繋がりを求め、小さなことでも大きなことでも諦めずに挑戦し続けるしかないのだ、と励みになった。

そして私が新企画においてチャレンジしたいと計画している国際共同製作に関しては、カンヌ監督週間のベンジャミン氏より「言語や文化の異なる人たちと一緒に仕事をするのは本当に大変で一筋縄にはいかないの、相当な覚悟が必要だ」と言われ、身が引き締まりつつも、しかし、いまの日本国内の八方塞がりな映画製作状況を乗り越えるためには、大変でもチャレンジするしかないし、その価値がある、と志新たに思った。日本国内のマーケットだけで映画を作り続けることは不可能だと、派遣が終わって数週間経ったいま、より一層強く感じている。

最後に、今回はオンラインとなってしまったものの、それが良かった面としては派遣人数が私を含み 4 名となったために、今年の東京国際映画祭で作品が上映された奥田裕介監督、中村真夕監督、安川有果監督という、現代日本の最前線で活躍する監督たちと一緒に参加することとなり、各監督の新企画ピッチを聞くことが出来て大いに刺激を受けたこと。これを機に、フィジカルでも各監督と交流が生まれ、情報交換をしながら日本映画のより良い時代を築く一端となれたら、と願う。

そして近い将来、この足で、ベルリンの地を踏めるよう精進したい。

金子雅和